

## 心理療法への来談動機

— 研究の展望と今後の課題 —

森 田 美弥子

### I. はじめに

治療・相談機関を訪れたクライアントを受け付けるに当たって、クライアント自身の来談動機を把握することは、クライアントが抱える問題を理解するためにも、またその後の処遇方針をたてる上でも、重要なポイントの一つである。初回面接でカウンセラーは、相談内容（主訴）を聴くと同時に、クライアントが何故今そのことで来談したのか—どうなりたいのか・どうしてほしいと望んでいるのか—を尋ね、問題の明確化をはかる。そこで十分に意志が共有されないと、処遇方針の決定が曖昧になり、その後の関係も必ずしもうまく進まなくなる。白木・立木（1991）はそれぞれアプローチの異なる複数のカウンセラーにより報告された35事例の成功・失敗要因をKJ法で分類し、カウンセラー側の要因として挙げられたものを「援助的関係の形成」「アセスメント」「治療構造の明確化」「カウンセラーのサポート・システム」の4点にまとめ、クライアント側の要因としては第一に「動機づけ」がいずれのカウンセラーによっても共通して指摘されていると報告している。

実際の面接において重視されているにもかかわらず、来談動機に関する実証的研究はほとんど見あたらない。それは、後述するように、来談動機という言葉に含まれる意味内容がかなり幅広く多岐にわたるものであることと、意識的な側面のみならず無意識的な動機づけという側面が多分にあるため客観的にとらえることが難しいことに起因すると考えられる。通常、来談動機という言葉は「心理療法を受けること」に対する動機づけを意味することが多く、治療動機と同義とみなされる。しかし、初回面接前後のクライアントにとって治療の具体的なイメージは必ずしも明確でなく、来談動機の意味も今少し広く「治療・相談機関に行くこと」に対する動機づけととらえることもできる。そこには、治療・相談機関やカウンセラーに対する認知にもとづく来談期待が絡んでいる。さらに、「来談動機が高い（低い）」というように、ク

ラレントが心理療法もしくは来談行動へと向かう心的エネルギーとしての動機づけの度合を示す場合と、「このクライアントの来談動機は何か」というように、動機づけの内容やそれを規定する要因を示す場合とがある。前者は来談意欲、後者を来談動機と呼んで区別することが可能ではないかと思われるが、後者の来談動機は、来談理由、来談目的とも置き換えられる。つまり、「治療や来談に何を求めているか」「なぜ来談したか」という問いの答えとなるものが来談動機だと考えられる。それは、「困った問題が生じたから」という悩みや症状の存在、「誰かに勧められたから」などといった来談経緯などとも関わってくる。このように来談動機という概念は、簡単に定義しきれない。

筆者は学生相談臨床の実践の中で、こうした来談動機の複雑さを体験してきた。学生相談室は医療機関と異なり、病理をもったクライアントから健康なクライアントまでかなり幅広い対象が利用する。もちこまれる問題も精神症状から一過性の青年期危機、そして学生生活上の悩みやトラブルに至るまで多様である。クライアントである学生にとって相談室は、治療、教育、サービスのいずれの場ともみなされ得る。カウンセラーの側は、発達促進援助という視点に立ち、狭義の心理療法的アプローチにとどまらない柔軟な対応が必要となる。ひるがえって他のあらゆる臨床現場で同様の現象が生じていると考えられるが、とくに学生相談の場合には治療と教育の両方にまたがる心理的援助機関であるため、何を求めて来談したかという来談動機のバリエーションが顕在化しやすい。そこで、これまで来談動機がどのように扱われてきたか整理を試みることは、今後の治療・相談事例のアセスメントに役立つと考えられる。

### II. 目的

本論文では、来談動機を「心理療法その他の専門家による心理的援助を受けようとする動機づけの内容、つまり専門家もしくはその援助に求めるもの」と広く定義し

## 心理療法への来談動機

ておくことにする。そして、来談動機という概念および、来談動機を把握する視点の明確化をはかることを目的として、これまでの文献を整理、検討し、来談過程におけるいくつかの要因との関連の中でその意味を考察する。最初に心理療法一般における考え方について概観し、次に学生相談の領域にしぼってまとめていく。文献の中では「来談（治療）動機」「動機づけ」「クライアントが求めて（期待して）いるもの」その他、いくつかの異なった表現が用いられていたが、引用は原文のまま記し、本文ではとくに前後の文脈上問題がない限り「来談動機」に統一した。

### Ⅲ. 心理療法における来談動機の位置づけ

心理療法の理論や技法について論じた文献の中で来談動機について言及している箇所を抜き出したものが表1である。これらを集約すると以下のことが指摘できる。

①クライアントの来談動機を理解することは、治療方針の決定、治療関係の予測、病態理解などに結びつく。

②来談動機には、自分自身が変化していくことに関する動機づけと治療者との関係をめぐる動機づけとがある。

③クライアント自身はそれらを意識している場合と無意識に有している場合とがある。

④そうしたさまざまな種類の来談動機は、その後の治療面接の進展を促進する要因にも妨害する要因にもなり得る。

⑤来談動機は面接の過程で変化していく。

これらの特徴は、来談動機の重要性①、多層性②③④、変化可能性⑤とまとめられる。来談動機はクライアントの来談行動そして心理療法過程を成立させているもとであるとの認識を前提とするならば、その重要性は自明の理なのかもしれない。しかし、心理療法実践において重要な要素として位置づけられているにもかかわらず、来談動機という概念の定義を明確に述べているものは少なく、臨床家あるいは研究者によって、重なり合っているものの多少異なった範囲の内容を含んで用いられているようである。

表1 文献に見られる来談動機のとらえ方

Appelbaum (1972)	「自己変化への願望（動機づけ）」：作業同盟を結ぶことのできる成熟した構え。あらかじめ備わったものではなく自我の強さの反映として治療開始後に学習されていく。 「援助を求める願望」：原始的・幼児的願望や魔術的期待によるものから、成熟した自己価や理にかなった判断によるものまで、さまざまな幻想や期待の表面的あらわれ。 「治療継続への願望」：治療者の傾聴や、自分（クライアント）に関心を向けられる体験により発達するが、治療者への全能的転移幻想などによる場合は変化への願望とは別物であり、むしろ妨害要因となる。
乾 (1981)	導入の段階を過ぎると、「自分を治療してほしいという合理的、現実的な目的（初期の治療動機）から、治療者に理解されたいといった別の目的（第二の治療動機）に変化していく。」
川戸 (1998)	「心理療法は、通常の場合には、クライアントの要請によってはじまる。…（略）…なかには、クライアント自身からの要請が無くて、クライアントの周辺の人々だけが困りきって訴えてくる場合もある。そのような場合には、まずは当人と困っている周辺の人たちとの関係性を問題にすることから、治療の場が設定されることになる。そうしたなかでは、当面の治療の目標は、クライアントの治療への要請を育てていくこととなる。前者の場合には、その要請にどのように治療者が応えるかがすぐさま焦点となる。」
Kernberg (1973)	「動機づけの水準は、治療者と協同しながら努力して自分の葛藤をうまく処理できるように変化していききたいという成熟した願望から、力のある強い存在によって世話や援助を得たいという幼児的・魔術的な期待に至る、連続体の上に位置づけられる。」「初回来談時の高い動機づけは自我の強さと結びついているならば、成熟した願望（動機づけ）につながり、望ましい予後をもたらす得る。」「変化への動機づけや（問題についての）心理学的とらえ方といった患者の準備態勢は、精神分析導入時の必須条件ではなく治療の初期段階で達成し得るものである。」
前田 (1978)	「治療方針や目標をきめ、相手にどのような態度で接し、どんな関係がついてゆかかを考えるためには、相手は何を求めて来談して来たのかを明確にしておく必要がある。最初に症状や問題がいろいろ訴えられはするが、治療への真の動機は、はじめはよくわからないことも多い。」
Meares, A. (1957)	一次的動機づけ：精神的・身体的苦痛を解決するために他者（治療者）に助けを求める心理。 二次的動機づけ：もっと健康になりたい・性格を改善したいなどの積極的な期待。
成田 (1981)	「患者の病気の定義、病気に対する患者の反応、受診理由、受診に至る経緯、受療態度を浮かび上がらせることが、とりもなおさず患者の病態理解を明確にし、その再検討を促すことになって治療につながる。」

<p>西村・上里 (1990)</p>	<p>「心理療法家に援助を求めようとする人は、援助をもとめる問題の種類に違いがあるばかりでなく、主観的な苦しさの程度や救いを求める切迫度、あるいは、差し出された援助をうけとる熱心さなどにおいて違いが大きいし、さらに、専門的な援助者である心理療法家が、すくうために、いったい何をしてくれるだろうかという期待も異なっているものである。…(中略)…治療者の側からすると、患者が望むように変化を引き起こすことができないことはよくあるし、ともすると、患者の望むようにはいかないものである。患者が、ある種の変化を望んでいるとしても、知らず知らずのうちに(力動的な理解では、無意識のことである)現状を維持しようと決意していて、結果としては変化に積極的に対立しているということは、臨床場面ではしばしば経験することである。」</p>
<p>小此木(1978)</p>	<p>「まず面接者は、被面接者が、何故(どういう理由で)、誰(本人を含む)によってすすめられ、何のために(どういう結果を予期して)、面接者にどのようなイメージを抱いて(また抱かされて)、どのような経緯によって、自分と出会うことになったのかを、知らねばならない。しかも、この動機づけは、面接初期のみならず、終結に至る面接の全過程に、終始さまざまな影響を及ぼす。さらに、面接途上における、面接者-被面接者の心的な相互作用は、最初の動機づけを促進し、あるいは解消し、新しい動機づけを生み出してゆく。」</p>
<p>小此木(1978) 橋本(1981) 狩野(1982)</p>	<p>①肯定的動機づけ：この面接で何らかの利益を得ることができるかも(合理的な期待)。 すばらしい魔術的な救済を与えてもらえるだろう(自己愛的な期待)。 自分の苦悩や不安や不幸を理解してもらいたい(助けを求める心理)。 秘密や罪悪感を告白したい心理。よく思われたい、親密さへの欲求。 一人で秘密もっていることに耐えきれず誰かに話してしまいたい衝動。</p> <p>否定的動機づけ：いったいこの面接者はどういう人か(疑惑と不信)。 もしかしたら害、不利益を与えるのでは(被害の不安)。 心の中を語って自分を保てなくなる(自尊心が傷つく不安、呑み込まれ不安)。 自分の秘密を面接者はどう利用するのか(社会適応上の現実不安)。 自分をどう評価するのか、蔑んだり責めたりしないか(超自我不安)。 親しくもない人に自分を見知られ恥ずかしい(見知られる不安)。</p> <p>②意識的動機づけと無意識的動機づけ：被面接者自身の自覚による。 ③合理的動機づけ(理性で納得)と非合理的動機づけ(情動的)。</p>
<p>渡辺(1991)</p>	<p>患者に引き起こされる感情として、 ①支配されるという不安とその裏にある支配されたい願望。 ②破壊されるという不安と破壊されたい願望。 ③罰せられるという不安と罰せられたい願望。 ④暴かれるという不安と暴かれたい願望。 ⑤救われるという幻想。 ⑥完璧になるという幻想。</p>

来談動機の種類や具体的内容は、主に精神分析の領域でとりあげられている。Appelbaum(1972)は「自己変化への動機づけ」という言葉を用い、クリニックに来るという行動に示される「援助を求める願望」や「治療継続への願望」とは区別することを強調している。これをふまえて、Kernberg(1973)は、動機づけの水準は主体的な自己変化への願望から未熟な依存的期待や魔術的幻想に至る連続体の上に位置づけられるとし、精神分析的な心理療法過程の要因分析を行った結果報告の中で、治療同盟を形成できる自我の強さを有していれば治療開始後に「変化への動機づけ」は学習されていくものであると述べている。これらの研究では、自分自身が変化・成長することを求めて来談するというあり方を来談動機の中核におき、それをどう育てていくかが治療の成否に大きな影響を与えると論じられている。それと対比され

ている援助や継続への願望、依存的期待などは、治療者との「関係を結ぶこと」を求める来談動機であると表現することができる。関係への動機づけは、治療を促進する場合も妨害する場合もあり得るが、いずれにせよクライエント自身がまだ気づかない無意識的、非意図的な動機づけであることが多い。それを明らかにしていく作業は、クライエントが自分の問題にどう取り組もうとしているかを明らかにし、さらに促進していくことにつながる。

来談動機の水準や質の違いをめぐって、古くはMeares(1957)が一次的動機づけと二次的動機づけとを区別し、小此木(1978)・橋本(1981)・狩野(1982)は、肯定的-否定的、意識的-無意識的、合理的-非合理的(退行的)、といった「動機づけの葛藤性」をクライエントは必ず体験すると述べている。たとえば、身体

的な自覚症状の訴えは積極的で肯定的な動機づけが働いているが、生活史や内面的な体験などにふれられることには防衛的で否定的な動機づけが働くクライアント、一見動機づけが高く熱心であったのに突然中断してしまうクライアント、逆に表面は治療を拒んでいるにもかかわらず面接の中で内界や秘密を語ってしまうクライアントなどを理解し、治療的介入をしていく上で、こうした視点は重要となる。渡辺(1991)が、治療機関を訪れる際に「患者に引き起こされる感情」として6点にまとめているものは、まさに関係をめぐる動機づけの葛藤性を具体的に述べた内容となっている。

さらに、先の小此木らは「誰によって動機づけられたか」「それによって作られた治療(者)に対するイメージ」が来談動機のありように深く影響することも指摘している。来談に至る経緯や来談以前の治療(者)イメージなどが来談動機とどう関わってくるかについては、次節で述べる。

#### IV. 関連要因から見た来談動機 — 学生相談における研究

来談動機が多層性をもち、ことに無意識的側面が大きな働きをしていることから、直接それをとらえることは難しい。実際の面接の中でカウンセラーは、クライアントの来談行動や面接での言動などさまざまな手がかりを用いて、来談動機を判断し、あるいは感じとって、クライアントに問いかけ話し合うというプロセスを繰り返す。継続面接が開始されてからは、遅刻やキャンセル、

面接時間の引き延ばし、治療(者)に向けられた発言や態度、核心に触れそうな話題を避けることなど、いわゆる抵抗や転移の現象に着目し、カウンセラーとクライアントとの関係性の中で来談動機を把握しようとすることが多いと思われるが、初回もしくは面接初期の段階ではどのような視点が考えられるだろうか。

学生相談の領域では、学生の相談室に対するニーズや来談の特徴を把握する研究が行われている。ここでは来談動機を直接論じているわけではないが、表2にあげた文献は、その指標となり得る関連要因を示唆してくれている。仮説的な形で以下に提起してみる。

①来談動機の関連要因として、来談の自発性、相談内容(悩みや症状など)をめぐる問題意識のあり方、直接の契機、来談時期など実際の来談のしかた、相談機関やカウンセラーに対する認知、パーソナリティなど来談以前の構えがあげられる。

②クライアント自身が来談をどのように感じているか、問題意識のあり方は、来談動機の中心的な部分を形成していると考えられる。

③どのような経緯で来談したのか、来談行動そのもの到来談動機は反映されているだろう。

④来談がクライアントにとってどういう意味をもっていか、発達の視点から見ていくことも可能である。

⑤来談行動には、それ以前のクライアントの、治療・相談を受けることに対する構えが影響していると考えられる。

吉良(1994)は、自発来談には「来談経路としての自

表2 学生相談における来談研究

石谷 (1998a, b)	学生相談面接を、面接回数により分類し、クライアントの「相談体験」を記述。 短期面接(5回以下):急性の混乱・不安、漠然とした不適応感。 中期面接(6~30回):大学生活に対する不適応感。 長期面接(31回以上):大学生活から遊離。心理的問題の外在化。
福原(1986)	来談行動プロセス=悩み生起とその意識化→悩み解消欲求の生起→来談行動という流れでとらえ、このプロセスを促す要因と妨げる要因があり、動機づけの概念で理解できる。来談行動規定因としてのニーズの研究として、EPPSの15特性8因子による検討をした結果、行動レベルの来談には必ずしも結びつかないが、意志レベル(悩みの意識化、相談意志の生起)には関連ある。追従・秩序・親和・内面認知・救護・内罰へのニーズが来談にプラスの要因として、達成・自律へのニーズがマイナス要因として働く。
Grayson (1989)	「初回面接で、学生自身の仮説を尋ねる、他者の解釈に対する受容力を吟味する、状況間の関連を確認する、質問によって受け身的なクライアントを刺激する、問題の中心に向かって協力し作業していくことが効果的。」
河合(1998)	「学生相談を訪れてくる学生のなかには、“事務的”にある程度処理できるような内容に関して来談する者がいる。…(中略)…この場合に、そのようなことは××課で訊くとよい、というふうにすぐに答えを出さないことが大切である。一応学生の質問を聞いたうえで、少し待っていると、あんがい他のことを話しはじめ、実はそちらのほうがほんとうの主訴であることもある。本人がそのあたりをどこまで意識しているかわからぬときも多いが、主訴となるようなことを最初から言い出すのに抵抗があり、学生であれば普通に問題になるようなことを、学生相談に来るための一種の通行証のようなかたちで使っているわけである。」

<p>吉良 (1994)</p>	<p>自発来談の2つの意味として、  「来談経路としての自発性」：相談室を訪れるに至った経路が自発的か否か。  「取り組みとしての自発性」：本人自身が内面に問題を感じ、それに対して自発的に取り組もうとする姿勢を持っているか否か。  来談経路としては非自発でも来談した際に問題への「取り組み」と確かめたり賦活することは可能。逆に経路として自発でも「取り組み」が初めから明確にあるとは限らない。授業で見知ったカウンセラーに相談することは学外の治療・相談機関に比べ日常感覚に近い。相談ルートにのりやすいメリットはあるが、「取り組み」が十分に熟していないこともある。</p>
<p>クスマノ (1998)</p>	<p>「発達的なアプローチをとる学生相談のプロセスにおいては、“Owing the problem”（自分自身の問題を背負うこと）の援助が重要。」</p>
<p>森田 (1997)</p>	<p>大学入学時の相談室イメージとその後の実際の来談との関連を検討。  接近群（肯定的イメージ）：早い時期に気軽に来談。拠り所として繰り返し利用。  敬遠群（否定的イメージ）：来談自体が少ない。  消極群（中立的イメージ）：来談率は最も高いが短期間で終了。  保留群（無回答）：長期の面接継続率が高い。</p>
<p>鶴田 (1993)</p>	<p>7年間に担当した305事例を、精神的健康さ、性別、来談経路、来談月・契機、相談内容、面接回数、問題の発生時期、面接の終わり方、面接過程の中で語られた主題、カウンセラーの役割、面接で行われた心理的作業の各項目について分類。  入学期（1年生）：大学生活への移行に伴う問題、入学以前からの問題。  中間期（2、3年生）：スランプ、生き甲斐、対人関係の問題。  卒業期（4年生）：卒業前の混乱、未解決な課題、社会生活への準備・移行。</p>

発性」と「取り組みとしての自発性」という二つの意味があると述べ、後者が相談面接の展開にとって重要となることを示唆している。これは自分の問題を自ら引き受け解決に取り組んでいこうとする問題意識の熟成度を示している。クスマノ (1998) も「Owing the problem」という言葉で同様の趣旨を述べているが、「変化への動機づけ」(Appelbaum)とも通ずるものである。これらは必ずしも面接当初から明確ではないが、変化可能性をもち、面接の中で徐々に熟していく場合もあるだろう。

初回にクライアントが語る訴えと真の来談動機が一致しているとは限らないことは、比較的良好な経験するところである。河合 (1998) の言う「相談に来るための通行証」というような、いったん別の問題に形をかえての来談もある。鶴田 (1993, 1994) は、来談時の学年に注目し、学年ごとの来談学生の心理学的特徴をまとめることにより、来談の背景にどのような発達の意味があるのか記述している。学生相談室には学業・進路・学生生活などの現実生活上の問題から、対人関係・性格・精神症状などの内面的な問題までさまざまな相談があるが、そうした問題を携えて相談室を訪れることを、青年期の発達課題への取り組みという文脈でとらえ直す試みだといえる。

福原 (1986) は、来談をプロセスとしてとらえ、来談に至るまでの個人の準備性といった点に注目している。来談行動の規定因の研究を行い、EPPSにより測定さ

れた個人のパーソナリティとの関連を調べている。その結果、パーソナリティ特性は悩みの意識化や相談意志の生起には関連するが、来談行動には必ずしも結びつかなかった。さらに、福原は悩みがあっても来談しない理由についての検討を行い、「自分の問題は自分で解決すべき」「他人は信用できない」といった回答に見られる自己と他者との関わりについての意識が来談への認識にも影響していると述べている。一般大学生の来談イメージやニーズに関する他の調査研究でも、相談室は「暖かい」「安心な」援助機関と認識される一方で、あくまでも不適応時に利用するものとして「暗い」「重い」「行きづらい」所とみなされている(早川・佐藤・林・1994, 西川・鈴木・1994, 荻原・吉川・山田・1995, 櫻井・有田・1994)。自己成長・変化への動機づけが、来談しない方向に作用していることになり、来談以前の個人の治療・相談(者)に対する認知やイメージと来談との関係について課題をなげかけている。これについて森田 (1997) は、大学新入生の相談室イメージとその後に来談の関係を検討し、相談室に対する肯定的/否定的イメージと来談の有無、面接期間の長短および帰結との間に一定の傾向が見いだされた。

この他、石谷 (1998a, b) は、面接経過の中でクライアントが体験しているものは何かという視点から、面接回数の長短による比較を行っている。継続面接開始後に来談動機が変化していく過程を見ることが出来る。ま

た、視点を限定して相談室によるグループ・プログラム（畠山ほか・1998）や心理テスト（佐藤・1998，増井・1998）を希望する学生の特徴や対応を報告する中で来談動機に触れているものもある。

心理療法における来談動機は治療過程の進展にとって重要であるが、多層的であり、直接簡単にとらえることは難しい。しかし、とくに学生相談領域での研究から、来談のもつ意味を、来談行動（来談のしかた）を通してとらえることにより、間接的に来談動機にも光を当てることができるのではないかと示唆が得られた。また、来談動機は変化可能性をもっており、プロセスとしてとらえる必要があると考えられる。

## V. 今後の展望

### —プロセスとして見た来談動機

心理療法一般の文献から、来談動機は治療の展開にとって重要なものであり、意識的／無意識的、変化への動機づけ／依存的関係への願望、治療促進的／妨害的などの多層性をもち、面接経過の中で学習され変化していくものと位置づけられていることが示された。また、とくに学生相談の文献からは、相談内容をめぐる問題意識、来談経路、来談時期・契機などから来談動機をとらえられること、そこには相談イメージといった来談以前の構えも影響を及ぼしていることが示された。

筆者はこれまでに学生相談事例における中断・終結・再来談といった来談経過の分析および相談室イメージと来談の関係の検討を行い、それを通して、先に述べたような来談動機の意味や特徴を再確認することができた（森田1990, 1991, 1992, 1993, 1997）。

実際に来談する以前のクライアントがもっている「治療・相談（者・機関）およびそこを訪れること」に対する構えは、来談の準備性として来談行動の基盤を形成し

ているようである。治療・相談に関する認知やイメージにはクライアントのパーソナリティ、とくに日常の対人関係パターンが反映されており、この段階から「自己変化への動機づけ」と「他者との関係への動機づけ」が存在していると考えられる。

来談に至る経緯は、悩みや症状という問題の出現と、治療・相談機関についての情報との出会いがなければ成立しない。しかし、それが実は発達課題への取り組みというような自己探索の糸口であったり、あるいは依存対象となる他者を求める願望を背景にもっていたりする。多くの場合、最初は半ば無意識のそうした来談動機は、クライアントが自分の問題をどうとらえているか（問題意識）、なぜ今ここへ来談することにしたのか（時期・契機、来談経路）、何を求めているか（来談期待）など、初回の面接で語られたり行動で示されたりしたものを手がかりに理解することが可能である。

カウンセラーがとらえたクライアントの来談動機をフィードバックし、何が問題か、何をしていくことが必要かのすりあわせ作業は初回面接以降も繰り返される。来談動機を明確にしていくことは、自分がどうなりたいか、どこをめざしているかという基本的な問いにもつながるものとなる。悩みや症状という問題をきっかけにして自分を問い直すことが心理療法だとする立場をとるならば、クライアントの来談動機は面接の中心的な位置づけをもつといっても過言ではない。したがって、来談行動に関連する諸要因の総体として来談動機をとらえていくことは、面接過程全体を見ていくことにもなり有意義であろう。

以上の流れをを図式化したものが図1である。これまでの研究では各要因の関連性については十分に検討されてこなかった。個々の事例において経験的に論じられている来談動機のあり方を言語化していくためには、来談

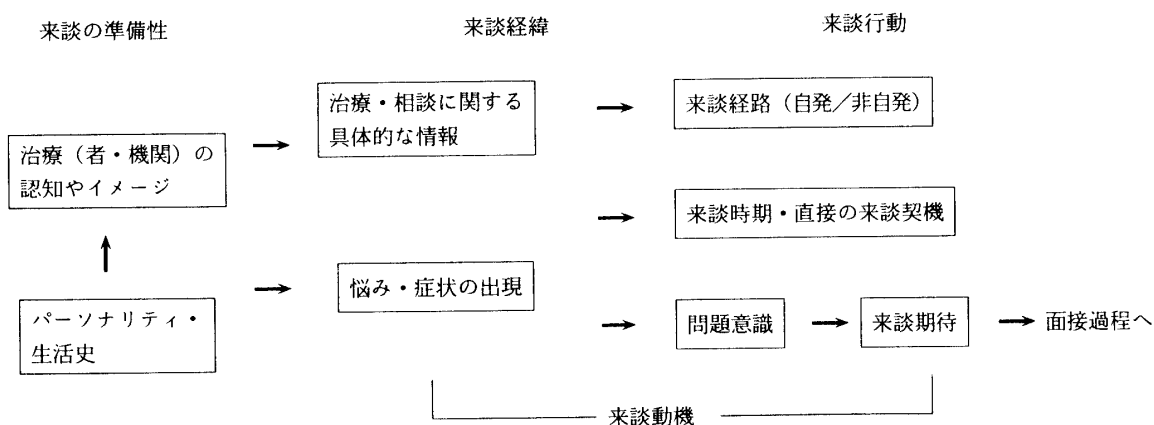


図1 来談動機の関連要因

プロセス全体の流れの中で来談動機を見ていくことが重要ではないかと考えられる。要因間のつながりとその変化を記述していくことを今後の課題としたい。

## 参 考 文 献

- Appelbaum, Ann 1972 A Critical Re-examination of the Concept 'Motivation for Change' in Psychoanalytic Treatment. International Journal of Psycho-analysis 53-59
- 福原真知子 1986 来談行動の規定因—カウンセリング心理学的研究— 風間書房
- Grayson, Paul A. 1989 The College Psychotherapy Client: An Overview. Grayson Paul A. and Cauley Kate (Ed) College Psychotherapy. Guilford Press. Pp.8-28
- 橋本雅雄 1981 精神分析的面接その1 II 診断面接(2) 動機づけについて 小此木啓吾ほか(編)精神分析セミナー1 岩崎学術出版社 Pp.92-94
- 畠山朝子・沢崎真史・J. クスマノ・石川嘉彦・金沢吉展 1998 学生相談におけるニーズサーベイ—アンケート・グループヘニーズを持つ学生についての分析 日本学生相談学会第16回大会論文集 102-103
- 早川千恵子, 佐藤成子, 林さち子 1994 調査報告—「不安・悩み」に関する調査— 東京女子大学学生相談室報告書, 1, 3-42
- 乾吉佑 1981 治療的退行—精神分析療法の治療状況に対する第一の当事者(患者)の反応 小此木啓吾ほか(編)精神分析セミナー2 (精神分析の治療機序) Pp.27-51
- 石谷真一 1998a 学生の相談体験に着目した相談面接の意義と役割—短中期相談例の検討を通して 日本学生相談学会第16回大会論文集 108-109.
- 石谷真一 1998b 学生の相談体験に着目した相談面接の特徴—中長期相談例の検討を通して 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集 126-127.
- 狩野力八郎 1982 医療を受ける心理と医原神経症 岡堂哲雄(編)現代のエスプリ179患者の心理 至文堂
- 河合隼雄 1998 心理臨床における学生相談の方向性 河合隼雄・藤原勝紀(編)学生相談と心理臨床 Pp.2-10. 金子書房
- 川戸圓 1998 心理療法の場の設定について 小川捷之・横山博(編)心理臨床の治療関係 Pp.86-90 金子書房
- Kernberg, Otto F. 1973 Summary and Conclusions of "Psychotherapy and Psychoanalysis, Final Report of the Menninger Foundation's Psychotherapy research Project". International Journal of Psychiatry 11, 62-77
- 吉良安之 1994 大学カウンセラーの立場から来談の自発性について考える 九州大学カウンセリング学科論集 8 14-22
- クスマノ, J. 1998 自分自身の問題を背負うこと—成熟のしるし— 鳴澤實編著: ころの発達援助—学生相談の事例から—, 75-80
- 前田重治 1978 心理療法の進め方—簡易精神分析の実際 創元社
- 増井紀子 1998 学生相談における心理テストの果たす役割に関する一考察 日本学生相談学会第16回大会論文集 106-107
- 森田美弥子 1990 学生相談室イメージの分析—大学入学時のアンケートにもとづいて— 名古屋大学学生相談室紀要 2 17-24
- 森田美弥子 1991 対人関係の問題で来談した新入生事例の検討—「近づきと遠ざかりのアンビバレンス」の視点から 名古屋大学学生相談室紀要 3 15-23
- 森田美弥子 1992 学生相談室に再度来談した事例の検討 名古屋大学学生相談室紀要 4 21-27
- 森田美弥子 1993 中断事例の検討 名古屋大学学生相談室紀要 5 30-40
- 森田美弥子 1997 学生相談室イメージと来談の関係—大学生を対象にして 心理臨床学研究15 406-415
- 成田善弘 1981 精神療法の第一歩 診療新社
- 西河正行・鈴木典子 1994 学生は学生相談室をどのように見ているか?—短期大学と専門学校の学生相談室調査を通して— 慶應義塾大学学生相談室紀要, 22・23, 63-76
- 西村良二・上里一郎 1990 心理療法学 上里・鏑・前田(編)臨床心理学大系第8巻(心理療法2) Pp.1-29 金子書房
- 荻原公世, 吉川政夫, 山田實 1995 学生相談のイメージとあり方—学生相談室に関する調査・中間報告— 東海大学学生相談室報告, 28, 120-129
- 小此木啓吾 1978 精神分析的面接 懸田克躬ほか編: 現代精神医学大系 4 A1精神科診断学 I a 中山書店 Pp.83-158
- 櫻井信也・有田モト子 1994 SD法による学生相談センターに関するイメージの測定 学生相談研究, 15, 10-17

- 佐藤尚代 1998 大学生の心理的成長を目的とした  
1-Session Counseling の試み—TEGフィードバック  
の積極的活用 日本学生相談学会第16回大会論文  
集 104-105
- 白石大介・立木茂雄 1991 カウンセリングの成功と失  
敗—失敗事例から学ぶ 創元社
- 鶴田和美 1993 来談学年からみた大学生の個別相談事  
例の心理学的特徴 名古屋大学学生相談室紀要, 5,  
3-29
- 鶴田和美 1994 大学生生活サイクルにおける学年別の心  
理学的特徴 第27回学生相談研究会議(鳥取シンポ  
ジウム)報告書, 86-92
- 渡辺雄三 1991 「病院における心理療法」第2章  
Pp.43-61 金剛出版
- (1998年9月16日 受稿)

## ABSTRACT

### A Review of Studies on the Motivation for Psychotherapy

Miyako MORITA

The significance and characteristics of the motivation was pointed out on this review. The motivation of client is very important for psychotherapy. It implies both the hope for self-change and that for relations to other person. Clients are often unaware of their own true motivation. Therapists can understand it through clients' referral process, that is, how and when they come to ask for treatment.

From literature review of researches on student counseling, the motivation is regarded as the process which includes images toward psychotherapy and therapist before visiting counseling center. The process model of motivation was suggested.